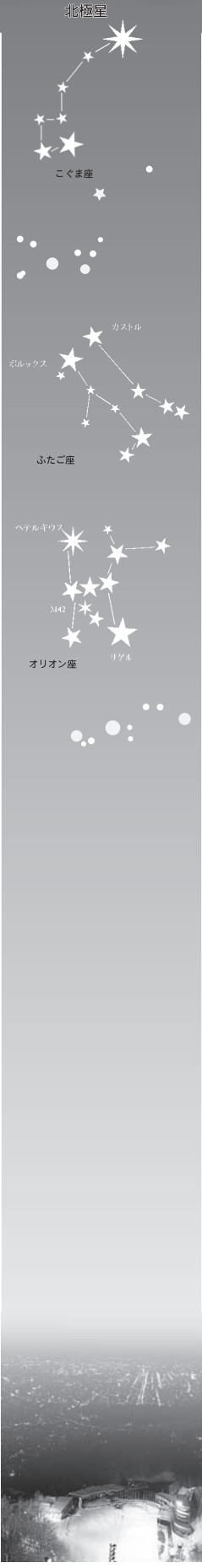
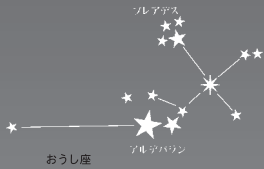


ポラリスを仰ぐ北の大地から



ポラリスを仰ぐせたなから

北部檜山医師会 会長 森 利光

陽が沈みノックボールが見えなくなり野球の練習が終わります。腹ペコで疲れた体を引きずりながら家路につく時、満天の星に押しつぶされそうでした。そんな記憶が中学時代の体験として残っています。

札幌からせたなへ移り、海の見えるところに居を探しました。1年後、海岸沿いの小さな部落をぬけ、山に向かってしばらく上ったところに築20年のログハウスを見つけ、修理して住むことにしました。周囲100mには人は住んでおらず、熊が出るため北海道犬を飼いました。

セタと名付けた犬は白い中型犬で血統証書付の天然記念物です。主人以外の言うことは聞かず、何にでも向かっていきます。この前はマムシとやり合いました。時に先祖がえりと思えるような狼の遠吠えを月夜に向かって発します。通勤は車の後ろに乗り込み、病院の職員駐車場の隅に寝そべて昼間を過ごします。漁り火をみながらの帰りは車の中で大騒ぎです。しかし家が近づいてくると静かになります。戦闘モードに入るようです。町では街灯をつけてくれたのですが、消すようお願いしました。星が見えにくくなるからです。家について車を降りると上空には中学生の時にみた星空がひろがっています。宇宙の時間軸で見たら45年なんて一瞬です。吸い込まれそうです。セタはそんな主人にお構いなく敵が侵入してきていないか家の周りを偵察に走りまわります。

小さな病院勤務とはいえ、医師会の書類だけで1週間で何cmにもなります。病院の院長確認印は毎日何回押しているのでしょうか。自立できていない町立病院の運営に悩み、地域医療計画や、公立病院改革プラン、新専門医制度など自分の力ではどうしようもない問題でモヤモヤしている時、美しく煌めく銀の星空の下では些細な問題のように感じてしまいます。

還暦を迎えた新米ドクター

十勝医師会 会長 栗林 秀樹

還暦を迎え若い頃のあれこれを思い出した。

新米ドクター（小生です）と新米ナース（名前は伏せます）の実話です。

①ベテランナース「先生ヨクジョウシンありますか?」。新米ドクターの心の声、「欲情心?無いと言えは嘘になるし、昼間からありますと正直に言うのも恥ずかしいし…」とモジモジしているとナース曰く、「目の前にあるじゃないですか、翼状針」。

②オーベンドクター「○○さんのケツガスとっておいてね。よくみて、ちゃんと触ってやれば大丈夫だ」。新米ドクター「さ、触るんですか?素手でですか?」。オーベンドクター「まあ、手袋をはいた方がいいことはいいな。思い切ってさすのがコツだな。頼んだぞ」。新米ドクターあちこち探し回り、やっと導気管を見つけた所へベテランナース「導気するんですか?」。新米ドクターの心の声「ああ、導気ともいうのか」。ベテランナース「私がやりましょうか?」。新米ドクター「ありがとう。実はやったことがなかったんだ。お願いするよ。オーベン先生が言ってたよ。よくみて、ちゃんと触って思い切ってさせば大丈夫だって。あと、やっぱり手袋した方がいいってさ」。

③中堅になったドクターが肝硬変で入院中の患者さんにムンテラ。「お母さんの初盆なので帰りたいのはよく分かりますが、この通りまだ腹水がたくさんたまっている状態なので、今遠くまで移動するのは無理です。彼岸を目標に頑張りましょう。お母さんもきっと分かってくれますよ」。そこで新米ナース「昔から言うじゃありませんか。フクスイボンニカエラズって」。

④学生時代に父親が脳出血で倒れ、始めて救急車を経験した新米ドクターは今でも救急車のサイレンを聞いたたび「あ、また誰かあたったな」と思ってしまいます。そうです。サイレンの音はアーポー、アーポー...